年間指導計画から日案まで

舟木哲朗

幼稚園や保育所で保育を展開するに当って、指導計画は極めて重要な材料である。一般に、指導計画について、誤った二つの考え方がある。

その一つは、計画を立てた以上、何がなんでも最後までその通りやらなければ承知できないという考え方である。このような考え方で保育を展開すると、往々にして、幼児の実態を無視した強引な押しつけになり易い。計画はあくまでも計画であって、幼児の動きに即して臨機応変の処置がとられないと、何のための指導計画かということになる。計画を遂行するために保育をする（つまり幼児を繰り人形にする）のではなく、幼児のよりよい成長発達のために保育をする、そのための計画である。このことを誤っては、決していい保育の効果は期待できない。

もう一つは、幼児は計画通りに動いてくれないし、何よりも幼児の自由な活動を尊重しなければならないから、教師が勝手に計画など立てるべきではないという考え方である。出たとこ勝負でいこうという態度である。この考え方は、全然話にならない。もっとも、そんなことはしていない、計画は立てて保育していると誰も言われるかもしれない。では「自由遊び」の計画を見せてくださいと言われたら、果して何人の人がそれを示せるだろうか？　たいていの「自由遊び」というのは、時間だけが計画されていて、その中で何をするかは計画されていない。これでは「自由遊びとは登園から始業までの間の遊びをいう」とか「自由遊びとはカリキュラム外の遊びをいう」といった妙な定義が出てくる。つまり、小学校における休憩時間と同じになってしまう。これでは困る。

われわれは、どんなにがんばってみても、決して計画以上のことはできない。たまにあったとしてもそれは「ケガの功名」であってそのようなことになる確率は至って低い。すると、計画はやはり非常に重要なものになってくる。

ところで、指導計画については、一般には指導計画ということばはあまり広く使われないで、月単位のものを「カリキュラム」と呼び、週単位や日単位のものはそれぞれ「週案」「日案」と呼ばれている。これは少し間違っている。カリキュラムとい

うのは、全教育期間（二年保育なら二年間、三年保育なら三年間）の計画、一年間の計画、学期単位の計画、月単位の計画、週単位の計画、日単位の計画、以上すべてを包含するものである。そして私がここで「指導計画」と呼んでいるのは、このカリキュラムのことである。

すべて計画は、大きいところを先ず立て、次第に細かいところへ及ぶのが原則である。でないと、方向を誤るおそれがある。だから、幼稚園や保育所の指導計画は、先ず全教育期間の計画を立て、最後に日単位の計画に及ぶべきである。いきなり月単位の計画を立てるのは間違っている。

以上の考えに基いて、ここでは、一年保育を対象とする指導計画について、順を追って考えてみることにする。

これから述べることのうち、1、2、3は、現在松江市幼稚園教育研究会が共同研究で改訂しつつある「松江市幼稚園教育計画」により、4、5は現在島根大学付属幼稚園で実施中のものによった。

1. 年間指導計画（第一図参照）

この計画では、大まかに一年間を見渡したものを考える。年間の計画というのは、必らずしも月の区別は必要としないが、ここでは一応区別したものにした。

なお本来なら、年間の計画に次いで学期単位の計画を立てるべきであるが、この年間計画は月の区別がしてあるので、学期単位のものは立てないことにした。

この表について、若干説明を加えておこう。

○「主題」は、一か月を通しての幼児生活の中心になるようなものを、しかも幼児にぴったりするような表現で取り上げる。

○「単元」は、主題と関係を保ちながら、ほぼ一週間程度のまとまっ

（第一図）――年間指導計画一覧表

月	主題 単元	おもな経験					
		健康	社会	自然	言語	音楽リズム	絵画製作
四							
五							

（第二図）――月別指導計画表

月	主題	幼児生活の特色	おもな目標	区分	健康	社会	自然	言語	音楽リズム	絵画製作	誘導の水準	生活暦	単元	おもな活動	資料	小学校との関係		単元外の活動
													○○○					

た活動として取り上げる。したがって、毎月約四単元ということになる。単元の名称は、活動の名称を使うようにする。

○「おもな経験」は、各領域別に年間を通して幼児に経験させることのうち、重要なものを月に配当して挙げておく。もちろんこの際、主題や単元との関係を考慮する。

2. 月別指導計画（第二図参照）

この計画では、一か月単位のものを、かなり具体的に挙げる。もちろんこれは、前の年間指導計画に基くものである。この表についてもかんたんに説明をつけておこう。

○「主題」年間指導計画に同じ

○「幼児生活の特色」は、その月に見られる幼児の傾向の要約である。幼稚園に対する馴れの程度とか友人関係、能力の発達、季節、行事などによって、幼児の生活や態度傾向に、その月らしい特色が出てくるものである。それを知ることは、その月の保育を考える上に是非必要なことである。

○「おもな目標」は改めて説明するまでもないが、上の幼児生活の特色と関係のあることが多く出てくるであろう。

○「誘導の水準」は、その月の保育を展開するために教師が準備するレベルを意味する。これは、どこまでも保育展開のレベルである。目標ではない。

○「生活暦」は、特に保育と関係のあるその月の行事。

○「おもな活動」は、単元別にまとめて挙げる。これは六領域に分けない。

なお単元に含めることのできないものについては「単元外の活動」として一欄を設ける。

「おもな活動」欄は、必らずしも保育展開の順序と一致するとは限らない。（それは週単位の計画にゆずることになる）

○「資料」は「おもな活動」を展開するために必要な資料の意味である。

○「小学校との関係」は、上の「おもな活動」の内容を「小学校学習指導要領」と比較検討し、その関係をまとめておく。

3. 経験領域別系列表（第三図参照）

これは、右の二つに対して「付録」的な意味のものである。ここでは、かなり詳細な資料があげられ、領域別に内容を

（第三図）――経験領域別系列表

四	月	発達上の特質
	幼児の特色	
	誘導の水準	
	望ましい経験	
	教材・教具・資料	
	小学校との関係	

検討する際の参考に供される。

かんたんに説明すると

○「発達上の特質」は「幼稚園教育要領」のものをさらに、課程別（一年保育二年保育等の別）年令別にやや具体化したものにする。

○「誘導の水準」は月別指導計画に同じ。

○「望ましい経験」は、各領域別にその月で経験することが望ましいものを詳細にあげる。

○「教材・教具・資料」は「望ましい経験」展開のため必要なものをあげる。

○「小学校との関係」は月別指導計画に同じ。

4. 週単位の指導計画（第四図参照）

一般に週案と呼ばれるものである。すでに述べてきたことによって、この内容については細かい説明は要しないと思う。「その一」は表面で、週全体を通しての一応の計画である。「その二」は裏

（第四図その一）
週単位の指導計画（表面）

自昭和 年 月 日 至昭和 年 月 日	指導計画（ 年保育 組）

本月の主題		本週の単元	

園の生活指導計画		単元の目標	
区分	誘導の水準		おもな経験
健康			
社会			
自然			
言語			
音楽リズム			
絵画製作			

（第四図その二）
週単位の指導計画（裏面）

時刻	0900	1000	1100	1200	1300
月 日（月）	・	・	・	・	・
	・	・	・	・	・
月 日（火）	・	・	・	・	・
月 日（水）	・	・	・	・	・
月 日（木）	・	・	・	・	・
月 日（金）	・	・	・	・	・
月 日（土）	・	・	・	・	・

（第五図その一）
日単位の指導計画（表面）

昭和 年 月 日（ 曜日）	天気	気温

1. 保育計画（変更実施個所は赤で追記）

時刻	場所	幼児の活動	指導の着眼	備考

（第五図その二）
日単位の指導計画（裏面）

経験の中心	
目標	

2. 記事

	欠席
	遅刻
	早退
	備忘欄
伝達	

面で、日々の時間の経過に従った大まかな計画である。

5. 日単位の指導計画（第五図参照）

一般に「日案」と呼ばれるものである。「その一」は表面で、主として一日の保育を時間の流れに従って記入する。「その二」は裏面で全般的な記入にあてる。出欠席に関する欄をつくったり「伝達」という欄をつくったり、「備忘欄」をつくったりしたのは、使用上の便利を計ってのことである。

なお、一日の活動の中心や目標の欄をつくったのは、一日を、まとまった幼児の生活と考えたい気持からである。

以上かんたんに述べたが、幼稚園や保育所の指導計画は、このようにして、大きいところから細かいところへ及ぶべきである。

なお、「松江市幼稚園教育計画」は現在改訂中であるが、今学年度中に改訂を完了し、来学年度早々印刷される予定である。この指導計画は、二年保育（年少、年長別）と一年保育についての計画で、合本して一冊になる。

指導計画の形式や内容の取り上げ方はいろいろあるので、右のような考え方について批判のある方はどしどし指摘していただけば幸である。

（島根大学付属幼稚園）

書評

平井信義著
発達と育児よりみた児童学　上巻

平井信義氏のこの大著が出版されたことはまことにお祝いしたい。今回は上巻だけがまとめられているが、七百頁もある大冊である。氏が十年以上も前から、このような書物を出すことを夢みておられたことを私は知っていたし、そのことを心にとめてたゆまずに資料を整理しながら講義をまとめてこられたことを承知しているだけに、その集成をみたことに感慨を禁じ得ない。これは実に勉強家である氏の長年にわたる努力の結晶である。

この書物は個人でもっているのには大部すぎるであろうが、幼児を扱う施設には必らず一冊あってよいものである。内容は胎児期新生児期より幼児期にいたる発達を詳しく述べてあり、さらに児童期、青年期にもふれている。身体発達の面はとくに詳しいが、心理的発達の面に詳しい著者は随所に心理的発達をふくめて解説し、乳幼児の育児、学童、青年の指導にじゅうぶんな考慮が払われている。

（津守真）

（家政教育社　昭和三十四年　定価一、八〇〇円）